



第12回

元気スイッチ on!!

あつまれ! あいちのじどうかん

児童館もあなたの居場所
~いつでもきみをまってるよ~



2023年11月19日[日]

9:50-16:30

多世代交流プラザ (小牧市)

主催：愛知県児童館連絡協議会、名古屋市児童館連絡協議会
愛知県児童総合センター (公益財団法人愛知公園協会)
共催：愛知県
企画運営：元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん実行委員会
後援：名古屋市、一般財団法人児童健全育成推進財団、愛知県地域活動連絡協議会
全国児童館連絡協議会、全国児童厚生員研究協議会、中日新聞社

目次

目次	01
開催概要・日程	02
開会式	03
基調講演	06
第1分科会	11
第2分科会	14
第3分科会	17
第4分科会	20
出前じどうかんーあそびばー	23
アピールカード	26
閉会式	27
実行委員会	29

主 催：愛知県児童館連絡協議会
名古屋市児童館連絡協議会
愛知県児童総合センター（公益財団法人愛知公園協会）

共 催：愛知県

企画運営：第12回 元気スイッチon!! あつまれ！あいちのじどうかん実行委員会

後 援：名古屋市
一般財団法人児童健全育成推進財団
愛知県地域活動連絡協議会
全国児童館連絡協議会
全国児童厚生員研究協議会
中日新聞社

2023年11月19日（日）

09:50～10:00 オープニングアクト

10:00～10:30 開会式

10:30～11:30 基調講演

13:00～15:30 分科会

15:45～16:30 閉会式

10:45～15:00 あそびば

開会式

■ 主催者あいさつ

名古屋市児童館連絡協議会
会長
塚本 岳



おはようございます。名古屋市児童館連絡協議会会長の塚本岳です。よろしくお願いします。

日曜日ということで、職場の児童館を開館しながら、都合をつけて参加された方も多いと思います。学びの1日になるはずですので、今日学んだことを現場に持ち帰り、より子どもたちのために尽力してまいりましょう。

今回の大会テーマの「児童館もあなたの居場所～いつでもきみをまってるよ～」や「こどもどまんなか」というワードは、今本当に必要なテーマだと思います。子どもの貧困や不登校が増えたり、ドン横、トー横キッズと呼ばれる中高生が大人に搾取されたりするなどの問題があり、こども家庭庁でも現在、子どもの居場所についての検討が重ねられています。そんな中、児童館は子どもの居場所作りに大きく貢献できていると思っています。公の施設で、子どもが自分の意志で自由に来館でき、自由に遊べる場所は少ないと思うためです。

ぜひ皆さんには、今日学んだことを自分の職場へ持ち帰っていただき「児童館もあなたの居場所～いつでもきみをまってるよ～」あるいは「こどもどまんなか」のような言葉を、貼り出してほしいとも思います。

それをやるには、やはり自問自答しなければならないと思います。不登校の子や中高生が来館したとして、本当に「いつでも」迎えられるような環境を、僕たちが整えなければならないと思いますし、大人が思う以上に、子どもたちの「ここにも僕の居場所がなかった」というダメージは大きいと思います。市町村によってシステムは違いますが、できることはあるはずです。コロナの影響もありますが飲食禁止などのルールから、玄関の外でお菓子を食べて、また中に戻ってくる。果たしてそれが子どもの居場所なのかということです。これから来る子たちをどう受け入れるかが課題ですね。

コロナでかけた制限を今少しずつ解除していますが、ふと「子どもの管理がしやすいからこのままでいこう」と、心のどこかで思ってしまうこともあります。しかし、管理しやすいことと居場所があることは真逆です。面倒くさいけど、子どもがしたいことを受け入れるのが僕らで、目の前の子どもたちが何を求めているか、考えてやっていきたいなと思います。

明日からできる、予算もルールも関係ない話をひとつすると、僕は児童館にいる職員がお互いを「先生」と呼ぶことはもったいないと思います。ツカモトさんや、ガクさん、おいおっさんなど、呼び方を変えるだけで、ぐっと子どもとの距離が縮まるのではないかと考えています。子どもからなめられるかもしれませんが、本当に子どもの声を聞くためには、なめられてなんぼかなとも思います。全ては子どもたちとの信頼関係を築いて、子どもの声を聞くためです。今日1日たくさん学んで、現場にフィードバックしましょう。僕も学びます。以上、挨拶でした。

■ 共催者あいさつ

愛知県福祉局子育て支援課
課長補佐
花村 広美 様



ただ今ご紹介をいただきました、愛知県福祉局子育て支援課の花村でございます。

本日は「第12回 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん」に、大変多くの方々にご参加をいただき誠にありがとうございます。また皆さま方には、日頃から児童館や放課後児童クラブなどにおきまして、未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて、ご尽力をいただいております、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

さて、昨今では、地域のつながりの希薄化や少子化による子ども同士の育ち合い・学び合いの機会の減少などにより、子どもが地域コミュニティの中で育つことが、困難となっております。このため、子どもが安全に安心して過ごせる児童館の重要性が今後、ますます高まっていくものと考えております。

本県におきましても、愛知県児童総合センターにおきまして、蓄積してきた様々なノウハウを活かして、地域の児童館の活動支援を行うなど、県内児童館の中核的機能を担いながら、地域の児童館活動の充実に努めているところでございます。今後とも、皆さま方と協力・連携をしながら、児童の居場所づくりを始めとする、子育て支援の充実に取り組んでまいりたいと考えておりますので、引き続きお力添えのほど、よろしくお願ひ申し上げます。

なお、本日は、NPO法人かっぱらば編集室の川島理事長より「かっぱらば編集室はいつもにぎやか」をテーマとした基調講演をいただき、また、様々なテーマに沿った分科会が行われます。少子化、コミュニティの減少や孤独、不登校、ネットいじめなど子どもたちを取り巻く課題が複雑になります中、本日のこうした機会が、皆さま方が現場で抱えている課題に対する解決の一助となりますことを期待しております。

最後になりますが、本日まで参加の皆さま方の益々のご発展とご健勝を記念致しまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願い致します。

■ 来賓あいさつ

愛知県地域活動連絡協議会
会長
加藤 愛子 様



皆さまこんにちは。ただ今ご紹介いただきました、愛知県地域活動連絡協議会の加藤でございます。本日に「第12回 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん」が開催されましたこと、誠にありがとうございます。

今年のテーマは、「児童館もあなたの居場所～いつでもきみをまってるよ～」と伺っております。児童館は子どもにとって、大切な居場所であります。親でもなく、学校の先生でもない、スタッフの方々の役割は、益々重要になってきていると思います。本日は、県内の各地から一同に集われまして、研修をされるわけでございますが、私もこの大会に参加させていただくことを大変嬉しく思っております。本日を迎えるにあたりまして、役員の方々を始め、本日まで携わってこられました皆さまのご苦勞をお察し申し上げます。また、本日は有意義な交流の場になられることと思います。

地域で、子どもたちに関わっている方々にとりまして、様々な人々と地域を超えて繋がっていることは、最も大切なことの一つであると感じております。人と人との繋がりは、益々大切になってくるのではないのでしょうか。子どもの「育ち」に関わることは、すぐに結果や成果が目に見えるものではございません。しかし、沢山の愛情を受け皆に大切に育てられた子どもは、やがて大人になり、次の世代の子どもたちを大切に育ててくれるのではないかと考えております。そして子や孫の世代に受け継がれていくのではないのでしょうか。

私たち、愛知県地域活動連絡協議会は、愛知県の母親クラブとして設立されました。現在では、みらい子育てネットとして、児童館を拠点に活動している子育て支援のボランティア団体でございます。今年で40年目を迎えました。

私たちの主な活動は、子どもを事故から守るための事故防止活動として、公園の遊具や防犯の点検を行っております。また秋には、子どもたちを交通事故から守るため、会員手づくりのマスコットを配布する交通安全街頭活動をしました。親子の交流活動など、様々な活動をしております。これも全て子どもを支援するための活動と自負しております。子どもを「守る」思いは、全ての会員の思いであります。少子化の進行、虐待やネグレクトなど、子育て世代を取り巻く環境は大きく変化しております。私たちは「地域の子は、みんな我が子」を合言葉としまして、大きな視点に立ち、子どもたちが健やかに育つことを願い、様々な取り組みは未来に大きく繋がっていくことと思います。児童館の先生方のお力添えをいただきながら、これからも活動をして参りたいと思っております。

結びに、本日の大会のご成功と、ご参加の皆さまのご活躍をお祈り申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

9:50~10:00

オープニングアクト みなくる音楽隊

愛知県小牧市小牧児童館みなくる音楽隊さんによる楽器演奏とコーラスを披露されました。0歳から大人まで幅広い世代の方が参加され、舞台の上がとても華やかになりました。子ども達が大好きな楽曲「にじ」と「さんぽ」を演奏していただき、会場は温かい雰囲気いっぱいになりました。



『かっぱらば編集室はいつもにぎやか』 現役スクールカウンセラーがお伝えする、子どもの居場所のつくり方



【講師】川島 多美子さん

NPO法人 かっぱらば編集室 理事長

【プロフィール】

1998年静岡県清水区興津に子どもの居場所『かっぱらば編集室』を始める。子どものコミュニケーションと体験の場である“一日児童館『かっぱらば広場』”の企画運営を始め、スクールカウンセラーとして小中学校で21年間、親や子どもの相談に携わる。

心の内外の環境を整え、自分らしく生きられる場を自ら作り出していくことができる人材の育成をコンセプトにして、2015年「K-happiness」を起業。心理学的手法により人間関係を円滑にするためのチームカウンセラーの養成講座や、子育てをテーマにした講話など子どもがいきいきと生きられる社会づくりを目指して活動中。

著書「子どもたちのための小さな居場所のつくり方」電子書籍

はじめに

2020年に新型コロナウイルスが全国、全世界で拡大しましたが、そのような時でも私達は、屋外にシートを広げて活動を継続していきました。緊急事態宣言の期間中は3回お休みをさせていただき、時間を短縮したり、食事を作っていたものを弁当を用意して配付しながら活動を続けてきました。本来だったら休むべきなのかもしれませんが、NPOだからやらなければならないという思いの中で、死と隣り合わせの責任があることを理解しているながら、活動を続けました。子ども達が学校に行けなくて外でも遊

べないという環境で不安を感じている時に、家に一人っていると心が壊れてしまうから、そのようなことを避けたいと思いました。変わらない人や場所があることが、人の心には何よりも大切だと思うからです。

平成10年12月に 「かっぱらば編集室」始まる

かっぱらば編集室は、今から25年前に始まりました。最初は週に1回、17時から18時30分まで実施していました。内容は、初

めの45分間は自主勉強をして、その後おやつを食べ、残りの45分間は自由な遊びという流れです。その中の勉強時間に子ども達みんなが、宿題や勉強道具を持ってやってくるのです。勉強したくない、宿題が嫌だと言う子どもがたくさんいるのに、かっぱらば編集室にはどうしてみんな勉強道具を持ってやってくるのかというと、わからないところをしっかりと教えてもらえるからだと思います。「なんでそんなこともわからないの?」とか、「この間、教えたでしょ」と言うことはせず、わからない漢字は何回でも教えています。ですから子ども達は、安心して聞きやすいと感じるから宿題を持ってくるのだらうなと思いました。居場所づくりの活動をする中で、私は33歳くらいまで心理学の資格は一つも持っていませんでした。子どもを集めていて、子どもは行きたいと言うのだけれど、親御さんは「そんな資格もない人には預けられない」とおっしゃる方がいました。それならと思い立ち、心理学の資格を取り始めました。そして40歳の時に、スクールカウンセラーとして働き始めました。ちょうど全国的に、中学校の全校にスクールカウンセラーを配置しようという動きがその当時あったのですが、スクールカウンセラーになれる人がいないため、たまたま入ったという感じでスタートしました。



集団遊びから、 個人や少人数の遊びに変化

かっぱらば編集室を始めた当初は、子ども達は異年齢で集団を作って遊ぶということが普通でした。下は1年生から6年生まで、大体20人くらいの子も達が毎回やってきて、ドッジボールやハンカチ落としなどの遊びをして、異年齢でみんなが楽しく遊んでいました。

平成14年頃の学校週5日制が始まった時に、今度は静岡県の静岡市清水区にある興津の団地をお借りして、子どもの体験とコミュニケーションの場として、“一日児童館「かっぱらば広場」”を始めました。その2年後、平成16年にDS(携帯型ゲーム)が発売された頃から、子ども達の様子が一気に変わってきました。それまでは、異年齢の子も同士で遊んでいたのが、ゲーム機を買ってもらえた子とまだ買ってもらえない子に分かれ、ゲームを持って外へ遊びに行くという子ども達が増えていきました。それまでは集団で遊んでいたのですが、遊ぶ人数も少人数になっていきました。かっぱらの子も達で地域のお祭りに出店したときも、初めは異年齢の7~8人でグループを作ってやっていたのですが、途中からは同学年の少人数、小学校2年生が2~3人で組むという形になるのです。当然できないのですが、なおかつ、当日になって家の用事で今日は出ませんということがその頃から増えていきました。

25年間子ども達を見てきて 感じること

親御さんに携帯電話が普及してきて、固定電話があまり使われなくなっていく中で、子ども達が友達と家で連絡を取れないということが起きてきました。さらに、少年団や塾、習い事に行く子どもが増えていき、子ども達がとても忙しくなっていました。そして、とても疲れているという感じが見受けられました。友達と約束をしても、親が子どもに「週末、一緒に出かけるよ」と言うと、友達のところに行けなくなってしまい、そのことを自分で相手に連絡できないということになりました。そんな中で、自分で考えて自由に動ける子ども達の世界がどんどんなくなっていったと感じます。

年に数回、集会場でのお泊まり会の企画をする中で、昔は、一つの画面でみんなが映画を見ていたのですが、ある頃からポータブルのDVDの機械を持ってくる子が出てきました。みんなで映画を見ているのに、その子は自分の見たいものをポータブルで見る。すると、興味のある子がそっちへ行ってしまう、みんなで楽しむという機会がどんどん減っていったと思います。

そのような中で、令和ではスマホがないと友達と連絡が取れないというのが現状です。地域によるとは思いますが、中学1年生でもほとんどの子がスマホを持っていると思います。最近かっぱら広場でも、小学生が多いのですが、スマホを持ってきている子がすごく増えています。以前、ゲーム機がなくなって大騒ぎで探したことがあるのですが、そういう感覚はあまりなく、どこへでも置きっぱなしにしてしまいます。親は必要があればスマホに連絡をしてきて、子どもは連絡が来れば、スマホで親と話している光景が見受けられます。

私は小中学校でスクールカウンセラーをやっていますが、コロナによって外で遊べない時期が非常に長く続いたことが、子どもにとっては大打撃でした。子どもは友達と関わらなければならない小学校の時期を、家に一人で過ごしていました。親は働きに行き帰ってくるのですが、子どもが外を歩いていることすら良くないというような空気が流れていた時もありました。それでも、小さい子ども達は学童保育や児童クラブに通っていましたが、小学4年生から中学1年生ぐらいのスマホ等の連絡ツールを持っていない子ども達は、家に一人でずっと過ごしてきたわけです。その子ども達が今、中学生になってきている中で、いろいろな心の問題が起きてきています。

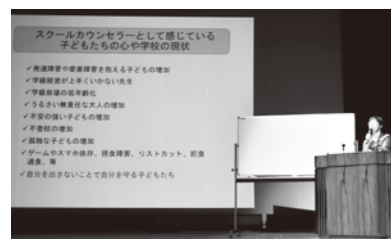
現在35歳前後の私の息子の当時からもありましたが、人の家にあげてもらえないとか、自分の家に友達をあげられないということがあります。友達が遊びに来た時に、「この部屋で遊びなさい。他の部屋はだめ」と言えば済むことなのですが、コントロールが効かないからなのか、人が来ることを煩わしいと思う親御さんが増えているのか、人の家にも行けない、自分の家にもあげられない、でも外で遊ぶところがないという状況で、結局子どもはどんどんSNSの中に居場所を求めているのが現状だと思います。

スクールカウンセラーとして 感じている 子どもたちの心や学校の現状

発達障害や愛着障害を抱えている子ども達の割合が非常に増加しているということがあります。実際、発達障害と聞いた時に、みなさんは、こういうタイプの子だなと頭にパツと浮かぶでしょうか？自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症、限局性学習症等いろいろな種類があるのですが、そういう子どもが、児童館や私たちの活動に来た時に、その子の特性を理解していなければ、ちょっと困った子だな、扱いづらい子だなというだけで終わってしまいます。その子が来ると、場が乱れるから嫌だなと感じてしまうと思います。子どもと関わる上で、今は必須な知識ですので、色々出版されている本でぜひ発達障害については学んでもらいたいと思います。

それから不安の強い子が非常に増えていきます。小学校1年生でも、親から離れられない子もいますし、中学生ぐらいになって、人の目が怖い、人混みに行けないということでカウンセリングに来る子どももいます。場合によっては、自分で気持ちがコントロールできなくなって沈んでしまったり、ちょっとしたことで混乱してしまったりする。そんな自分自身に気づいて、ネットで検索し、どこか病院に行きたいと自分から親に言ってカウンセリングに来るという例もあります。

親御さんも、やっぱり子どもは学校に行ってもらえると安心というところがあると思うのですが、そのためには家庭でサポートをしていただくことが必要です。しかし、親御さんも今は働く時代になり、仕事をして帰ってくると、子どもがいても親がずっとスマホを見ています。ある小学校4年生の男の子が、「自分たちにはゲームは8時までと言うけれど、両親はずっとスマホを見て、くそやろう」と言いました。今、その子は中学生になって教室に行けなくなり、それでも頑張って別室に登校してきています。でも4年生の段階で、この子は中



学で厳しくなるということが私自身は経験上わかっていました。だから家庭で子どもを大事に、いろいろな話をしっかり聞いてあげる、居場所をつくってあげるということが、実は今、とても大事だと思います。

不登校も非常に増加していて、私が行っている学校などは、1学年3クラスですが、各学級3人ずつは不登校の子がいるという状況です。今は、民間のフリースクールがすごく増えてきたので、親御さんも昔ほど学校に行かせたいという気持ちがなくなってきているのではと思います。ただ、子どもが学校に行かなくなった時に、ずっと一人で家にいると言うのです。親御さんも働きに出て、朝、親を送り出した後、家に一人でずっとスマホとらめっこしながら過ごしているのです。本当にそれで心は回復していくのか、今はそれでいいかもしれないですが、例えばその子が5年、10年と経った時、やっぱり引きこもりになっていってしまうということがあるだろうと思うのです。

更にゲームやスマホ依存も増えています。また摂食障害やリストカット、拒食、過食等も同じように増えています。昔は外に発散していたことが、みんな自分に怒りを向けるようになっていて、どんどん苦しくなっている子が増えています。だから、自分を出さないことで自分を守ろうとする子どもが増えているのです。

私達もかっぱら広場をやっていると、初めて来た子はウワーッと入ってくるか、黙って入ってくるかのどちらかなのです。ウワーッと入ってくる子は声をかけやすいのですが、黙って入ってくる子には、特に声をかけるようにしています。ここで遊べるよとか、これもできるよとか何度も何度も声をかけていくと、やっと少しずつ、これどうしたらいいのかなあ、これは何かかなあ聞いてくれます。

人間の行動には必ずきっかけがあります。行動に対して報酬があると、この行動の頻度が増えていく、これは認知行動療法のオペラント学習という心理学の理論です。子どもが声をかけてきた時に答えない、報酬がないとなると、この行動はなくなっていきます。だから、私たちは声をかけていきます。声をかけるという行動があっても、相手が答えてくれなければ、理論上、私達は声をかけなくなっていきます。よく話してくれる人は話しやすいから、どんどん話をします。でも、あまり話すのが上手じゃない、言語性が低い、そういう人や子どもに対して、私たちは無意識に話さなくなります。けれど、そこをあえて話していくよ

うにします。報酬がないけれど話していく。すると子どもは安心して、少しずつ話をしてきます。その時にしっかり答えていくことで、この子とのコミュニケーションが少しずつ育まれていきます。だから児童館で元気はつらつと遊んでいる子どもはそのまま遊ばせておいてあげ、何となく、暗くじっと一人でいる子には積極的に声をかけていってあげてほしいと思います。カウンセリングに来る子ども、本当にしゃべらない子どももいます。だから何かこっちがしゃべって間を持たせるのですが、来たくないのかなと思うけれど、「また次来る？」と聞くと「来る」と言うのです。問題を起こす子がいっぱいいるので、どうしてもそちらに目が行きがちですが、実はそんなしゃべらないおとなしい子ども達に光を当ててあげないと、このコロナの後、子ども達はどんどん内側に入っていってしまいます。

子どもの居場所に大切なこと

子どもの居場所に大切なのは、安心安全な場所なので大人は怒らないこと、子ども達のいじめがないことです。昨日のかっぱら広場では、子どもを散々、叱りました。それは、4年生の男の子が通りすがりに、同じ4年生の女の子をちょっとこづいたり、別の女の子に卓球の玉をピュッと投げたりしたのです。それを見て、その子のところに行き、「そういうことをするんじゃない！」と注意しました。するとその子は「やってないよ」と言うのです。「いややってたよ、おばちゃんは見てたよ」と言いました。その子とのやりとりをそれからずっと考えているのですが、あの子は本当に無意識なのだなと思いました。わざとやっているわけではなく、通りすがりにやるという感じなのです。それで、一人の女の子が私たちのいるところに避難してきました。その子がなんとなく怖いのだと思うのです。昔だったら、ちょっと叱ると出て行ったのです。部屋から出て行って、来なくなるかまたしばらくして来るかという感じでした。でも、その子はずっとそこにいます。ずっとこっちを見ているのです。だから、常に目が合うのです。どうしてこちらを見ているのか。考えるに、言葉が上手じゃないから気持ちがうまく伝えられない。だから、何かやる。やるかまってもらえる。子どもが一番つらいのは、無視されて存在してい



ないようになることです。だから家でおとなしくしていれば、いい子でいれば、親は家のこともやらなきゃいけないで忙しいから、放っておかれる。けれど何か無意識にすると、相手の子が嫌がったりなにかしらアクションがあったりし、相手の反応を見て自分がここにいるのだということを感じることができるのではと思うのです。その後、その子は突然ピアノで大きい音を出すのです。するとまた別の子が、「おばちゃんうるさいからやめさせて」と言うのです。私が「うるさいからやめなよ」と言うと、その子はニヤニヤするという感じであまり困った顔ができないのです。そうかと思うと、怒られているのに片隅でしゃべっている私たちのところにわざわざ来て、自分のお菓子をみんなに配ってくれるのです。昔だったらチツとか言って去っていったのに、かっぱら広場が終わる時間までずっと部屋にいます。この答えは、1か月後のかっぱら広場の時に続いていきます。大体すごく困らせる子というのは、何か月か経つとみんなに馴染んでいくのです。だからその子にとってみると、試し行動といって、相手を怒らせたり困らせたりしながら、自分のことを受け入れてくれるかどうかということを確認している行動なのだろうと思いつつ関わっています。

活動がわかりやすいということもとても大事ですし、そこにいるスタッフの仲がいいということも、実はとても子どもにとっては大事です。昨日うちの父さんとお母さんは離婚しているよ、今度の日曜日にお父さんに会いに行くんだ等ということは何人もが言ってくるのです。子ども達は大人同士の仲があまりよくないということも、とてもよく見ているのです。昔は、学校の先生とか児童館の人とかの Kategorie で子ども達は大人を見ていたのですが、最近はこの人、この先生という個人単位での見方をします。だから、この人は自分にとって危害を加えない人だ、この人は自分をすごくわかってくれる人だという捉え方をします。スタッフがとても仲がいいと、子ども達はそういうことを考える必要がないので、すごく安心して過ごすことができます。私

たちは3人でやっているのですが、大体私が昔のお父さん役みたいな感じで、だめなことはだめと言います。例えば、先程の男の子は私が叱っていますが、スタッフの一人は、その子が家庭的に大変なことがわかっているんで、一生懸命に声をかけてかまっています。私が叱ってスタッフみんながこいつはとなくなってしまうと、入れなくなってしまいます。その子の大変さみたいなものを、みんなが理解して関わっていくということで、子どもが安心して自由に過ごせる、自分で考えて自分で動ける、主体的に動くことができる空間というのが大事だと思います。そのために、きまりは最低限にしています。建物の中でボール遊びをしてはいけません、それだけがきまりなのです。だからボール遊びをしていたらすぐに叱る。いじめは叱りますが、それ以外は叱らないです。

一日児童館「かっぱら広場」の理念とスケジュール

「かっぱら広場」の理念は、屋根があって、大人がいる外の遊び場という考え方です。外で遊ぶというと、昔だったらいろんなものをグチャグチャしたり木を積んだりして遊んで、家に帰り、また次の日に続きをして遊ぶという感じで遊んでいたと思います。だから、「かっぱら広場」で片付けはさせていないのです。

「かっぱら広場」の告知は大体1週間前から前日ぐらいです。ただし、翌月の日程をこのチラシに書いておきます。時間は10時から16時、16時で終わりの時間厳守でやっています。午前中10時30分から12時までには小さな企画を用意して、お昼を食べた後にお誕生日会をやり、あとはのんびり16時まで過ごす。16時になったら一斉に片づけをします。大体毎回20人から30人ぐらい来ます。

一日児童館「かっぱら広場」のようす

この写真は、10月に焼き芋づくりをした様子です。一緒に写っているおじさんが、春はタケノコを、秋にはサツマイモを掘って



持ってきてくれます。その時に、かまどで火をたくのですが、ナタで木を細くしてくべていきます。ある時、子どもに「ナタって知ってる?」と聞いてみました。すると、子どもは「知ってるよ」と言うのです。「すごいね、小学生なのにナタを知ってるんだ」と言うと「マイクラフトに出てきたよ」と言うのです。マイクラフトというのは、子ども達に流行っているゲームなのですが、そこに出てきたナタが、その子にとってはナタだと認識しているのです。でもその子たちは、本物のナタを経験することにより、これがナタなんだな、こうやって木を切つて火にくべて、焼き芋ってこうやってできるんだなということを理解できるのだと思いました。

毎月企画を用意しているのですが、参加したい子は参加するし、参加したくない子は別に参加しないで遊んでいてもいいよと言っています。とにかく、今の子どもたちは何かと忙しいのです。暇な時間はゲームをやる。だからいつも忙しい感じです。来た時は、のんびり過ごす。別にゲームをやってもいいよと全然止めないのですが、ほとんどやらないです。やっても少しだけでしょうとすると、またみんなと遊び始めます。昔の子ども達は企画にワッと来て楽しむという感じでした。ところが最近、例えばちょうちんに絵を描く企画には、参加者がすごく少ないのです。なぜかという、結果が出るものを今の子どもは嫌うからです。うまいとか下手とかそういうものが出るのを嫌うし、何かやらされる感があるのは、嫌がります。描いたちょうちんを家に持って帰らないのです。持って帰ると、親が邪魔にするというか、昔だったら「やってきたんだね」と言ってもらえたと思いますが、今は何かを持って帰っても「あっそうなの」といった感じになるので、ほとんどの子ども

もが持って帰りません。

おやつで久しぶりにホットケーキ作りをしたらすごく喜んでいました。昨日はたこ焼きを焼きましたが、それも親御さんが家ではやらせてくれないと言うのです。やらせてあげたらいいと思うのですが、子どもがやると時間がかかって面倒くさいとか危ないからお父さんがやらせてくれないという子がいて、小学校5年生で初めてたこ焼きを作ったよと言っている子もいました。

スタッフの負担を減らすために、叱らなくて済むような場の設定をしています。居場所はしつけの場ではないと私たちは捉えています。だから、遊んだおもちゃは片づけなくてもいいのです。片付けは16時になると一斉にやります。16時ぐらいになると部屋中グチャグチャになるのですが、これが意外とみんな居心地がよくて、この中でまたおもちゃを拾って遊ぶとか、ブラレールの途中までできたものをまた組み立てて遊ぶという感じになっています。散らかしっぱなしだし、靴もそろえなくてもいいと言っていたら、他のところに遊びに行った子が、怒られた時に「かっぱらではいいんだよ。」と言ってしまい、その交流館の人に「ちゃんとしてください。」と怒られたこともありました。ただ片づけさせようと思うと、いつも片付けなさいとか靴をそろえなさいとか言っていなければいけない。それを言うだけで子ども達を見ている時間がなくなってしまうので、そこはご自宅でしつけてもらう。学校では比較的きちんとやっているんで、あえてここは居場所として自由にさせています。

お昼はスタッフが朝から作ってくれています。今の学校はセンター給食が増えてきて、いい匂いの中で過ごすということがあまりなくなってきたと思います。すごくお腹がすいていたり、最近朝食食べてこなかったり

する子も増えてきていて、「お腹すいたお腹すいた」と言っている子たちもたくさんいます。ただ、凝った物を作ってもみんな食べないのです。今一番定番なのは、わかめごはんや豚汁がどの子も喜ぶのです。昨日はうどんですが、うどんもあまり凝ったものだと食べない。素うどん、シンプルなうどんやカレーが好まれます。シチューなどはあまり食べたがらないし、きのこが嫌いという子が結構います。だから、本当に家でこれおいしいねとかこれ食べてみてとかいうことが減っているのだと思います。広場ではみんなに配り終えるまで待ち、みんなで一緒にいただきますをして、みんなで一緒に食べる。おかわりは何回でも自由をしています。

心理学に基づいた居場所づくり

心理学の理論がわかっていると子どものかかわり方が変わってくると思います。話さない子にどのようにかかわったらいいのだろうと悩むところもあると思うのですが、繰り返し話をしていけばいいと思います。先程の男の子の場合によっては困った子になってしまいますが、心理学を学ぶと、悪者がいなくなるということがあります。問題のある子どもの行動が、例えば愛着の問題からきているのか、場合によっては、発達障害があって相手の気持ちがわかりづらいということがあるのか、ADHDの子達などは、不注意や衝動性があるので、困らせることを何度も繰り返していくということもあります。けれど、そのようなことを理解していると繰り返しこうなんだよと言いながら、その子の気持ちを受け止めていくことで安心し、穏やかになっていくということがあります。だから、ぜひ、心理学を学んでいただけたらと思います。

子どもの居場所づくりをやりながら、お母さんの居場所も欲しいということで、お母さんのための子育てプチ心理学講座を2週間に1回開催していました。平日の午前中に開催していましたが、お母さん達も働くようになり参加者が減ってくると、託児の人を雇うことがどうしても採算が合わなく閉めてしまいました。スクールカウンセラーとして学校で働いていると、支援員さんたちが発達障害のある子や愛着障害がある子など、とても難しい子とかかかわっているけれど、心理学の知識が全然ない中でどう

したらいいのだろうという方に何度も出会います。そのような人たちを対象にした心理学講座を月に1回ずつ開催しています。以前は1回参加し、もう来なくなることがありましたが、今は1年通い続ける方が増えてきています。大人の関係がよくなると、子ども達はすごく不安が強くなるので、そんな大人の関係をメインに心理学で組立てているチームカウンセラー養成講座を始められています。現在、10人ぐらい参加してくれています。

地域や学校、他団体との連携

地域との連携ですが、とにかくいろいろなところと繋がっていくということがとても大事だと思います。どうしても自分たちと同じ、例えば児童館だったら児童館のメンバーとの繋がりがとりがちですが、地域の中のいろいろなところと繋がっていくことがいいと思います。

学校との連携については、小学校や中学校は先生たちが何年かごとに代わってしまいます。だから先生といくら良い関係になっても、先生が代わってしまうと、その学校とまた一から関係を作らなければいけなくなり非常に大変です。だから、今は私たちの活動のチラシをあげてもらおうという形になっています。

また、地域については、県営団地の敷地内で活動していますが、始めた当初の会長さんが非常に子どもを大事にする方で、助成金をくれたのです。その後長く続けられていたその会長さんが代わった時、助成金を出すのはおかしいという声があり、ゼロになってしまいました。先ほどお話した心理学講座の参加料や助成金でおもちゃを買ったり、食品を買ったりして子どもの居場所を運営していたのですが、それが一気にゼロになってしまい、困ってしまいました。それでもやめるといわけにはいかないもので、講座の売上ではほとんどやり繰りしていましたが、そこにコロナ感染の流行があり、講座に人も集められなくなって赤字になってしまい、どうしようという時に、歳末助け合いの共同募金の方が取材に来てくださって、全国区で居場所づくりの映像が流れました。すると、それを見た方が寄附をくださったり、大根や人参をくださったりして、なんとかすることができました。翌年からは県から子どもの居場所づくりや子

も食堂に助成金を出してくださるようになりました。団地の会長さんが代わり、去年からまた助成金を出してくださるようになって、今はあまりお金の心配をしないで運営ができていくという状況です。

NPO法人なので、総会の開催や登記などの様々な事務がありますが、それらをNPOセンターに委託して、運営面をサポートしていただいています。

他にも様々な団体と繋がっていますが、地元の児童館が遊びの企画を持ってきたり、遊びの時間に企画をやってくれたりすることもあり、とても助かりました。

心理学は心の羅針盤

最後になりましたが、子どもを叱ることは簡単です。言うことを聞かせてこの場をなんとかしようというのは簡単ですが、次はもうこの場に来なくなります。信頼関係ができていない子には叱っても来続けてくれるということはありません。しかし、一般的には叱られたらもう行かないとなると思えます。

子どもにとっての安心安全な場所を作るため、子ども達との信頼関係を築くには、子ども一人一人をよく見て、その行動や表情から心を読み取っていく力が必要です。子ども達にとっての居場所は、場所ではなくてそこに居る人なのだと思います。心理学は先の見えない現代社会において、先を照らす心の羅針盤の役割を果たしてくれます。ぜひ心理学の世界に足を踏み入れて、その豊かな世界を自分のものにしていてもらえたらと思います。仕事の上でも役に立つと思いますし、みなさんのご家庭や人生にもきっと役に立つと思います。

かっぱらば編集室の様子は、ブログにもアップしています。気のついた時にのぞいていただければと思います。

それでは、これで終わります。ありがとうございました。



第1分科会

テーマ：こどもを中心に据えた児童館の役割と可能性

“こどもまんなか”児童館をDO(実践)しよう！

みなさんの児童館は“こども”を“まんなか”に据えられていますか？

令和5年3月に作成された「こども・若者の居場所づくりにかんするこども・若者向け報告書(こども家庭庁)」では、こども・若者の居場所づくりにおいて大切にしたい視点がまとめられています。児童館の役割を再確認しながら、大切にしたい視点「居たい・行きたい・やってみたい」で、あなたの児童館の可能性を見つめなおし、一緒に“こどもDOまんなか”児童館を実現しましょう！

1. アイスブレイク

A4用紙を4つの四角に折り、4マス自己紹介を行った。

- ① 氏名・ニックネーム
- ② 働いている市町村
- ③ 働いている市町村の推しスポット
- ④ やってみたいこと、挑戦したいことをグループ内で自己紹介した。

2. 情報提供・事例紹介

平成30年に改正された児童館ガイドラインでは、地域のこども・子育て支援に資する児童福祉施設として、児童館に5つの機能と役割が期待されている。

1. 遊びや生活を通じたこどもの発達
の増進
2. こどもの安定した日常生活の支援
3. こども・子育て家庭の課題の予防・
発見・対応
4. 子育て家庭への支援
5. こどもの育ちに関する組織や人の
ネットワーク

児童館の特性は、拠点性、多機能性、地域性の3つで、拠点性では、こどもが自らの意思で利用でき、自由に遊んだりくつろいだり、年齢の異なるこども同士と一緒に過ごすことができる拠点であること。そして、それを支える児童厚生員がいることが重要になってくる。多機能性では、こどものあ

らゆる課題に直接関わることができ、こどもと一緒に考え、対応することが求められている。地域性では、地域住民、関係機関などと連携して、こどもの健全育成の環境づくりを進めることが大事になってくる。これら5つの機能・役割と3つの特性をもつ児童館における活動内容についても、児童館ガイドラインで8つの項目として示されていて、今回の元気スイッチのテーマ「こどもの居場所」の提供についても位置付けられている。つまり、児童館は、こどもが安全に安心して過ごせる居場所になることが求められていて、そのために、児童厚生員の役割がとても重要だということ。次に、全国の児童館のデータについて、令和3年全国児童館実態調査の結果からの引用で、開館日数については、調査時はコロナ禍であったこともあり、臨時休館や利用の制限などにより減少しているが、通常時は年間平均294日ということで、1年の8割以上を開館している施設となる。学校の年間平均授業日数は約200日で、学校よりも長い期間、こどもたちの居場所となり続けている、とても重要な場所だと言える。開館時間については、平日の開館時刻は9時台が54.3%、閉館時刻は18時台が45.3%と最も多く、19時以降も開館している児童館は11.2%ある。閉館時刻を時期により変えるなど、ニーズに合わせて柔軟に対応している児童館もある。利用者数についても、コロナの影響により令和2年度は減少したが、通常時は1児童館あたり年間延べ平均で約2万人のこどもたちが利用している。児童館の利用対象は、0歳から18歳未満のすべてのこどもで、乳幼児18%、小学生61.6%、中学生2.9%の不特定多数のこどもとその保護者などが17.5。

%利用する施設で、障がいのある子ども、いじめや虐待、不登校といった福祉的な課題を抱えるなど多様な背景や状況の子どもも利用している。これらのことより、これまでも、児童館が全国各地のこどもたちの居場所として、重要な場所になっていることが分かる。

こどもの居場所として大切にすべき視点として、ガイドラインでは、自己効力感や自己肯定感が醸成できること、こどもの自発的な活動や自主性を尊重し、社会性を育むように援助することが大切だとまとめている。さらに、居場所づくりにおける工夫として、こどもが意見を述べることのできる場の提供に取り組んでいる児童館が増えていること、こどもの社会的活動への参画ができるよう、こどもの視点や意見を児童館の運営や地域の活動に生かすように工夫されている児童館が一定程度あることが分かる。

全国各地の児童館におけるこどもの居場所づくりに関する事例として、

1. 東京都目黒区平町児童館

こどものやってみたいを実現するスタッフとして、小学生対象の単年度登録制のキッズスタッフと、中学生対象で登録不要のティーンズスタッフが、こどもたちの意見を児童館の運営に生かすため、定期的に会議を実施し、自分たちでルールの改善の検討を行っている。

2. 東京都町田市

こどもにやさしいまちづくりを進めている、中学生から23歳までの若者が、自らの力でやりたいことを提案して、認定されれば、補助金をもらって実現できる制

度「まちだ若者大作戦」を実施している。その相談や申込みを、普段から子ども委員会など子ども主体の活動に取り組んでいる子どもセンターが担っていて、子どもたちのやりたいことを市として、バックアップしている。

3. 東京都八王子市

子どもすこやか宣言の推進事業の一環として、子どもの意見表明やまちづくりの参画の機会を提供し、子どもの声や意見を受け止め、市政に反映している。その一つとして開催している「子どもミライ会議」の子ども企画委員や学生リーダーは、児童館が募集し、コーディネートしている。

その他、日常的に子どもたちの意見を聴く機会として、意見箱の設置やアンケートを行っている事例や、新たな児童館の建設や運営において、中高生からの提案をもとに整備するなど、イベント企画や来館者との交流などで中高生の活躍の場が設定されている事例を紹介。

以上、情報提供や事例紹介を通じて、これまで、児童館が全国各地の子どもたちの居場所として、重要な場所になっていること、そして、これからも、子どもを中心に据えた児童館として、子どもの声を聴き、子どもの視点に立ち、子どもとともに生きていくことが大切だということを共有した。



3. 個人ワーク I

<現状分析>

児童館が“子どもまんなか”であるかどうか、児童館診断シートを活用して、現状分析をした。これは、「子ども・若者の居場所づくりにかんする子ども・若者向け報告書(子ども家庭庁)」に記載されている大切にしたい3つの視点、「居たい(Stay)」、「行きたい(Go)」、「やってみよう(Try)」の項目について、参加者自身の児童館で、子ども目線で「できているか」どうかをチェックしていただき、グラフ化するもの。

できている部分とできていない部分を見える化し、次のグループワークではその強みと弱みをより具体化した。

4. グループワーク I

<“子どもの視点”できていることとできていないことの洗い出し>

個人ワーク I の現状分析をもとに、自分の児童館の強みと弱みをより具体的にグループ内で共有し、他の児童館と比較しながら、“子どもの視点”で「居たい」「行きたい」「やってみよう」のできていることとできていないことを洗い出した。

【できていること(強み)】

- ・ゴロゴロできるスペースや畳の部屋があつてくつろげる場所になっている(ソファなどで寝転んでマンガを読んでも大丈夫)
- ・職員がみんなやさしい
- ・企画ポストを設置している(子どもたちがやりたいことを書いて投函して、職員がサポートしながら実現する仕組み)
- ・子どもまつりで子どもスタッフが主体的に参画している
- ・館庭が広く、外遊びが充実している
- ・児童クラブを併設している児童館では、クラブ利用者が多く、誰かいるという安心感やクラブの友達に会いに来る機会が生まれる
- ・来館者が少ない児童館では、子どもやその保護者一人一人への関わりが充実できている

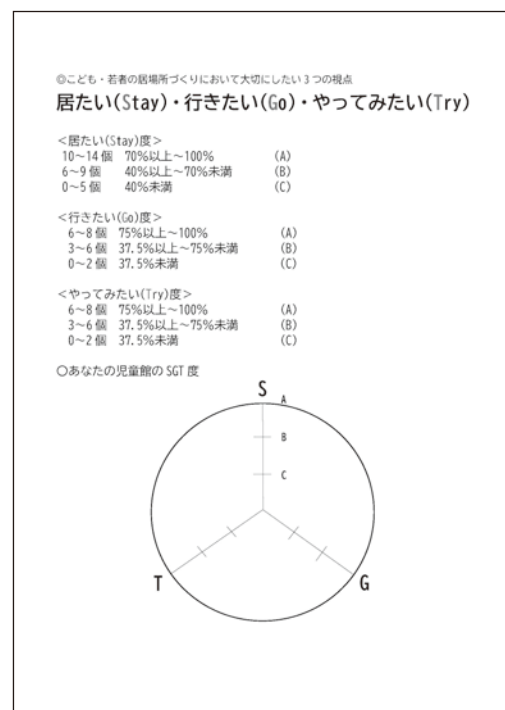
< “子どもまんなか” 児童館診断シート >

次の項目について、あなたの児童館で、子どもの目線で「できているな」と思える場合、□にシ点をつけてください。また、チェックした項目の()内のローマ字毎にシ点の数を集計してください。

- 自分を受け入れてくれる誰かがいる(G)
- いろんな人と出会う(T)
- 児童館に居ることの意味を問われない(S)
- くつろげる環境が整っている(S)
- 誰でも行ける(G)
- いろんな機会がある(T)
- 信頼できる人、味方になってくれる人がいる(S)
- 居たいだけ居られる(S)
- 児童館での過ごし方を選べる(S)
- 児童館が身近にある(G)
- すきなこと、やりたいことができる(T)
- 助けほしい時、児童館に助けられる人がいる(S)
- ありのまま、素のままにいられる(S)
- 児童館へ行くきっかけがある(G)
- 未来や進路を考えるきっかけがある(T)
- 誰かとコミュニケーションできる(S)
- 誰かとつながれる(S)
- 児童館へ気軽にに行く、一人でできる(G)
- 自分の意見を言う、聞いてもらえる(T)
- 話をきいてくれる(S)
- 気の合う人がいる(S)
- 自分と同じ境遇や立場の人がいる(G)
- 新しいことを学べる(T)
- 別の目的を持った人がいても、同じ空間にいられる(S)
- 児童館が安心・安全な場である(S)
- 児童館へお金がかからずに行ける(G)
- いっしょに楽しみ、学びをサポートしてくれる人がいる(T)
- 児童館に一人で居ても気にならない(S)
- 児童館へいつでも行ける(G)
- 自分の役割がある(T)

(S) _____ (G) _____ (T) _____

出典: 子ども・若者の居場所づくりにかんする子ども・若者向け報告書(子ども家庭庁)



- ・児童館の運営に子どもが主体的に関わっている
- ・企業との連携がうまくいっている
- ・職員に会いに来る子どもがいる

【できていないこと(弱み)】

- ・「やってみたい(T)度」が低い児童館が多い傾向
- ・館庭が狭くて一つの遊びを始めると、他の遊びができない
- ・開館時間が9時から17時では中高生の利用が難しい
- ・居場所づくりにおいて安心安全な場所をつくるのが大事で、そのためには職員との信頼関係が大切である
- ・都市部の児童館では児童館に来るのに手段がなくお金がかかってしまう場合もある
- ・土日など利用者が多いときは、施設の広さの問題で遊びを制限することがある
- ・児童クラブを併設している児童館では、どうしてもクラブ利用者が優先になってしまう
- ・利用者がなかなか増えない
- ・職員の意識としてもまだまだ幼児親子や小学生が中心で、中高生の居場所としては、意識も含めた体制づくりが必要
- ・安全確保のためには、一定程度ルールが必要であり、子どもたちが自由に遊ぶという観点では課題となる
- ・子どもの自発的な声の吸い上げ方が難しい

それぞれのグループ内の特に「できていない」ことは、これからの子どもたちの居場所づくりを考えていく上で、子どもたちが児童館に「居たい」、子どもたちが児童館へ「行きたい」、子どもたちが児童館で「やってみたい」という可能性のポイントとなる。

5. グループワーク II

＜“子どもまんなが”児童館を実現するための現実的かつ具体的な方法＞



子どもの居場所づくりにおける大切にしたい3つの視点「居たい・行きたい・やってみたい」を実現するための現実的かつ具体的な方法をグループ内で話し合い、全体共有するため各グループから発表した。

(1) 子どもたちが児童館に

「居たい」と思ってもらえる方法

- ・友達や仲間/本音が言える/居心地のよさ
- ・くつろげる場所/一人でふらっと行っても大丈夫/何もしなくてもいい/安心できる場所
- ・ゆったりできる/自由に過ごせる/職員がうるさく言わない/いろいろ許される
- ・一人で居てもいい/ボーっとして居てもいい/職員とおしゃべりしてもいい
- ・ゴロゴロしてくつろげる/話し相手がいる/友達がいる/遊ばなくてもいい
- ・親御さん向けのカフェスペース

(2) 子どもたちが児童館へ

「行きたい」と思ってもらえる方法

- ・近くにある/親が安心できる場所/自由に遊べる/職員に会いに来る/好きなマンガがある
- ・そこに誰か(友達・職員など)がいる/好きな玩具がある/話ができる・聞いてもらえる
- ・好きな遊びがある/友達がいる/乳幼児親子さん同士でママ友を作りたい/幼児と小学生の交流
- ・カードゲーム/やりたいことができる/無料で楽しいイベントに参加できる/おやつが食べれる
- ・行けば誰かに会える/職員が来てくれて「ありがとう」と受け入れてくれる
- ・イベントが充実している/好きなマンガの最新刊が置いてある/職員が一人一人と接する時間を作る/話を聞いてくれる職員がいる

(3) 子どもたちが児童館で

「やってみたい」と思ってもらえる方法

- ・子どもの意見を吸い上げる/おやつや調理系行事の復活(コロナ禍で中止となっている)/バンドやダンスなどができる中高生の居場所となるような施設整備/子どもたちが主体的に盛り上げるイベント
- ・ゲーム大会/家にはない楽器(ドラム・バイオリンなど)が演奏できる
- ・イベントやどこかに行く体験ができる/意見を聞いてもらえる雰囲気/自由に意見が出せる/職員が聞いてくれる
- ・大人の手伝いをしたい/家ではできない

- ・何かちょっとした特別なことができる
- ・夜の児童館でキャンプ
- ・子どもを中心に考える/子どもが主役になれる

6. 個人ワーク II

＜実行宣言＞

これまでのグループワークを踏まえ、参加者が明日以降、児童館に戻ったときに、子どもたちの居場所づくりのために、“子どもDOまんなが”児童館への最初の一步として、実際になにを実践するのか、実行宣言シートに記入し、参加者同士で共有した。

(実行宣言例)

「来館者へ元気づけて挨拶します！」
 「コミュニケーションをさらにしっかりとる」
 「子どもの声をよく聞く」
 「子どもと話し、どんなことでも聞いてあげる」
 「どの子にもやさしく声かけしていきます」
 「利用者がしてみたいこと、職員にしてほしいことを伝えられるポストを設置します!!」 など



7. 担当者から

＜♪I Was Born to Love You＞

第1分科会では、子どもを中心に据えた児童館の役割と可能性を見つめ直し、できることから少しずつ取り組んでいただき、“子どもDOまんなが”児童館の実現に向けて、最初の一步を踏み出していただける内容になったと考えます。参加者の方の「子どもたちのために!」という想いが強く感じられ、これからさらにそれぞれがよりよい居場所づくりを実践していくことを楽しみにしています。居場所とは、子ども自身が決めるものであるため、私たち行政職員や児童館職員が子どもの視点に立ち、子どもの声を聴きながら、子どもとともにやっていくことが必要です。子どもたちの居場所の一つとして、“児童館もあるよ”と一緒に伝え続けていきたいと思います!

テーマ：子どもの声をきく

『耳をすませて』～子どもの声・思い～

みなさん児童館に来る子どもの声をきけていますか？自分から積極的に声を出せる子、児童厚生員からの声掛けを待っている子など、いろいろな子どもの姿があります。子どもの声や気持ちを尊重していくには、どのように「きく」とよいのか？事例を通して、グループワークをしながら、思いや考えを話したり、聞いたりしながら交流を深めていきましょう。児童館が、子どもにとって居心地のよい居場所となるよう、みなさんと一緒にヒントを見つけませんか？

1. グループワーク①

新城市 鳥原児童館 森野久美子さんの事例「おばけやしき」を通して、子どもの声にどのように耳をすませているか、を考えた。

事例1「おばけやしき」

児童館では1年に1度開催する「児童館まつり」がある。8年前からこの児童館まつりを一緒に企画・活動したい子をこどもスタッフとして、小学4～6年生が集まっている。「こどもスタッフ会議」と名付け、イベントの企画、準備、当日の進行を職員と一緒に活動している。

以前、児童館まつりで「おばけやしき」をしたことがある。当時はまだ低学年で、お客さんとして参加していた子ども達が、この年のこどもスタッフとなり、企画から当日の運営まで実施することとなった。しかし、開催日が迫ってきても、一向に準備が進まない状況であった。こどもスタッフの「やりたい。」という気持ちと進捗状況が一致していなかった。

a) 問いかけ

あなたは、こどもスタッフ会議の担当者。
あなたなら、子どもの声や思いに“どのように耳をすませる”のか？

4枚の写真をヒントに子どもの声や思いを想像しながら、自分なりの意見を出し合う。

あなたがそのこどもスタッフ会議担当の職員だとしたら、“どのように耳をすませていくか”活動の様子を撮影した写真から子どもの声をグループで話し合った。

写真① 既成のおばけお面に子どもが彩色している場面

写真② おばけお面をかぶった子ども達の場面

写真③ お面をかぶった子どもがおばけポーズをしている場面

写真④ お化け屋敷をする上でのルール作りを子どもと職員が話し合っている場面



b) シェア

グループ1

おばけやしきのイメージを子どもにきく。何が必要か、どんなものを準備すればよいのか、を子どもと話し合う。

職員や子どもが実際におばけやしきをやってみて、細かく確認をする。

経験談：子ども主体で行っていた。高学年になると、子どもの経験したことを積み重ねておばけやしきのアイデアに繋げていた。

安全かどうか、楽しくできるかどうかは

職員が見ていくが、基本は、子どもが主体で進めてきた。

グループ2

ファーストタッチとして、「おばけやしきってどんな感じだった？」「どんなおばけやしきにしたい？」というイメージが沸くような声かけをきく。

「おばけやしきに必要なものは何？」「おばけの顔とかも描いてみる？」「名前ははどうする？」

「お面のアレンジをしてもいいよ。」「どんな感じにしたらびっくりするかな？」「怖い話読んでみる？」等と具体的な声かけをする。

経験談：全く同じ活動を経験したことがある。3年生が、実行委員として初めて経験した時はやりたいことが多く、まとまらなかったで、大人が介入した。やはり、大人の声かけが大事だと思った。

グループ3

子どもの持っているイメージがそれぞれ違うので、きく。

おばけのイメージを絵や言葉（怖い、暗い等）で表してみたらどうかと提案する。こどもが本物のおばけやしきの経験で感じたこと「道はどうだった？」「どんな暗さだった？」等具体的なイメージができるよう問いかける。

子どもがお客さんとして参加した時の経験は、怖さを感じる受け身の立場であった。おばけやしきを企画するにあたり、驚かせたいのか、怖いと思っほしいのか、どのようなことがやりたいのか、という子どもの声や思いをきく。

子どもの持っているおおまかなイメージに、どのように声をかけたら、子どもも主体でできるのか、大人が誘導していくのはよくないと思うので難しさを感じる。

グループ4

おばけやしきの経験があるか、どのようなことが怖いかな等をきく。
更にどのようなおばけを知っているか、何が怖いのか、暗さが怖いのか、突然の大きな音に恐怖を感じるのか等と子どものおばけのイメージを具体化する。
おばけを全く知らない子に対して、本や資料等を準備し、イメージを広げていけるようにする。
子どもが作ったものに対して、十分に褒めてあげることが大切である。
子どものアイデアを拾いながら作っていくことは、難しいと感じる。

グループ5

絵や絵本を用意し、子どもがおばけやしきをイメージできるようにする。
お面を着け、なりきっている姿や子が「今からやるぞ!」という気持ちになれるような言葉をかける。
「これだけで大丈夫?」と足りない部分に気づかせていく。
子どもと一緒に企画書を作っていくと、子どもの気持ちがひとつになる。
子どもも主体でやりたいが、職員からの質問攻めになってしまい、楽しいものが楽しくなくなってしまう。声かけの難しさを感じている。
企画書等、こどもスタッフの気持ちがひとつになるものがあるとよい。



c) グループワーク①

まとめ

それぞれの児童館で同じような経験をした方、計画中の方もいた。その中で、子どもが主体的に活動できるようにするため、子どもが主体性を大切にを進めていくには大人がどこまで介入していくのが難しいと感じる人が多くいた。

児童館職員として子どもと関わる大人が、子どもの声や思いをどうきくとよいのか、どう声をかけるとよいのか、イメージを具体化させていくことが必要な年齢や経験値があることも考慮していくといのでは等、色々な意見が出た。それらをそれぞれの児童館での今後の活動に活かしていけるようにしていく。

2. グループワーク②

事例2「あなたならどうする?」

「おばけやしき」に向けたこどもスタッフ会議中。参加していた4年生1名と6年生3名の様子。6年生が4年生に背を向け、4年生が一人でポツンとしている姿が見られた。



a) 問いかけ

この写真から、4年生は何を思っているのか? また、あなたがこの子だとしたら、どのような声や気持ちが出てくるかを想像してみる。また、その子どもの声に対して、児童館職員として、どのように耳をすませていくか、意見を出し合う。



b) シェア

グループ1

4年生には、「困ったことがあるの?」ときく。

3人の6年生には、「何、話しているの?」と会話に加わっていき、隣にいる4年生に話の内容が聞こえるように6年生の話をきく。

4年生が一人になっている理由が分かりにくいので、様子を見守っていく。

グループ2

写真を見ると4年生が話し合いに入っていないように感じる。
4年生に、何がしたいかきく。
背を向けている6年生に「みんなの顔が見える位置で話してみようか?」と声をかける。
児童館職員は4年生と6年生が話し合える橋渡しをする。

グループ3

話し合いが始まる前か後なのか等、いろいろな想像した。
背を向けている子がいることや一人になっている4年生の立ち位置が気になったので、声をかけていくことが必要だと感じた。
「みんな、集まってみよう。」と声をかけ、輪になるよう促す。
「何かやりたいことある?」等、子どもから話しやすいところからきく。

グループ4

4年生からは「つままないなあ。」の声聞きこえる。
話し合いをする場所としては、玩具のある部屋ではなく、子どもが向かい合って話し合える机がある部屋や意見が書き出せるホワイトボードがある部屋で行えるとよい。

グループ5

4年生は外を見ていて違う方向を見ている。一人の6年生が、4年生との間に壁のように塞いでいる状況に見える。
4年生からは「つままない。」「何をすればいいのかわからない。」「どうしたらいいのかな。」という心の声がきこえてくる。「みんなで輪になって、座ってみようか?」「どんなふうに進んでいるのかな?」「私も話の仲間に入りたい?」「他の子の意見もきいてみようか?」「決まったことは、紙に書いてみよう。」等と子どもの声をききながら、児童館職員が少しずつ介入していき、4年生が一人になっている状況を無くしていく。